

■学位論文要旨（修士）

イベントの変遷における 京都観光 —近代から現代—

西 田 ゆりか*

本稿では、京都観光とイベントという2つの視点に着目し、これらがどのように関連し、今日の観光都市・京都として成り立ってきたのか、またどのようなイベントを開催して京都に人を誘引してきたのかを、近代から現代までの流れの中で検証する。

京都には数え切れないほどの観光資源があり、それらを目的に、年間を通じて観光客が訪れる日本有数の観光都市である。特に、ここ数年の観光客数は順調な伸び率を示しており、京都市が毎年調査している「京都市観光調査年報」によると、2005年（平成17）の観光客数は4727万1千人と、過去最高を記録している。この順調な伸び率の要因の一つに、京都市の実施している政策が関係していると考えられる。京都市が策定した最新の政策である「新京都市観光推進計画～ゆとり うるおい 新おこしやすプラン21～」では、イベントの創出を推進策の一つとして掲げており、これ以前のプランにもイベント創出の施策が掲げられ、イベント観光が推進されてきた。では、過去の京都はどのような施策により集客を行ってきたのであろうか。京都には昔から続く、多くの年中行事や伝統行事が存在し、それらは今日も継続され、毎日のように各地で開催されている。このことから証明されるように、過去の京都もイベント観光を推進し、観光客を誘引してきたと言えるのではないだろうか。なぜなら、昔から続いてきた伝統行事などのイベントが今日も続いているのは、一定の集客性が見込め、なおかつ知名度を上げる手段としてメリットがあると考えられるから

* 京都女子大学大学院 現代社会研究科
公共圏創成専攻

である。イベントは魅力的であれば、リピーターを見込め、反対に魅力的でなければ集客力はなくなる。そのため、京都では、観光客誘致に向け、新たなイベントを創出する一方で、伝統行事などの昔から続くイベントを時代のニーズに合わせて変化させるなど、柔軟に対応させることで、今日まで来たのではないかと考えた。

第1章では、観光の定義と日本における観光の歴史を明記し、人びとがどのように観光を意識し始め、現在の観光形態まで変化してきたのを辿った。また近年、世界各国で観光産業が急速に成長、観光産業が重要視される中での日本の観光政策を明記した。

第2章では1868年（明治元）から2006年（平成18）を明治・大正期、戦中、戦後の高度経済成長期、不況期、バブル崩壊後と5つの時期に分け、観光都市として京都が成立してきた様子と、その当時の京都の社会的背景をインフラ面、経済面、社会面に分類し、それらがどのように京都の観光に影響を与えてきたのかを交えながら論じた。近代に入り、急速にインフラ面が整備されるに従い、短時間で長距離の移動が可能となり、簡単に京都に訪れることが可能となった。そして、これらのインフラ面や民間双方の観光に関する組織が構成されるに従い、京都は観光都市として徐々に成長した。観光に力を入れるには、イベント開催などの施策のみならず、インフラ面や組織の整備が重要な点となる。

第3章では、明治・大正期である近代に開催された特徴的なイベントを取り上げた。近

代に開催されたイベントは地方単位、国家単位で取り組まれた博覧会が主であり、これらの博覧会が京都の発展と観光にどれほど貢献してきたのかを論じた。この章では、まず始めに、明治期に日本で初めて開催された京都博覧会を取り上げた。京都博覧会は、東京遷都で荒廃した京都の復興策として取り組まれたものであり、これをきっかけに、京都は徐々に活気を取り戻し、観光都市としても第一歩を踏み出した。さらに、国家が主体となり開催した第四回内国勸業博覧会の際には、大々的なアピールが行われ、京都の知名度を日本のみならず海外にも広げ、復興と観光都市としての勢いを増した。そして、第四回内国勸業博覧会と同時期に開催された、平安遷都千百年記念祭の開催をきっかけに、平安神宮が造営され、さらには時代祭が創設されるなど、大規模なイベントの開催と共に、新たな観光資源が多数生み出された。

第4章では、昭和期からのイベントとして、1926年（昭和元）から1989年（平成元）までの時代を、戦中、戦後の高度経済成長期、不況期と3つの時期に区分し、これらの時期に開催された一過性のイベントや昔から続いているイベント、新しく創出されたイベントに着目し、これらの時代に、どのようなイベントを開催し、人びとを集客してきたのかを、代表的なイベントを探り出し検証した。昭和期からのイベントは、明治・大正期のような国家や地方単位での博覧会のような大規模なイベントとは違い、大小さまざまなイベントが開催されてきたのが特徴的であった。

第5章では、1990年（平成2）から今日まで開催されているイベントを取り上げた。平安建都1200年記念祭は明治にも、平安遷都千百年記念祭の名で開催されたものである。明治、平成に開催された各記念祭は、長い歴史と、長年の首都として栄えた京都ならではのイベントであり、他の都市には真似のできないものである。そして、このような京都特有のイベントが開催できる歴史と観光資源が揃っているからこそ、京都は人を惹きつけることができると考える。記念祭の他に、今日の観光振興策として注目を集めているコンベンションに着目して、コンベンションが京都観光にもたらす効果を検証した。また、1985年（昭和60）から2005年（平成17）の20年の間に京都市で開催された各種イベントにどれほどの変化が生まれたのかを検証するため、「観光情報京都」をもとに、各イベントを10項目に分類し、1985年（昭和60）と2005年（平成17）の両年度を比較した。

第6章では、従来から続いているイベントとして、宗教関係では遠忌法要と開帳を取り上げ、京都にある各寺社の本山の存在と、そこで開催される宗教行事がどれほど京都の集客性と観光に影響を及ぼしたのか論じた。また、伝統産業として五条坂の陶器まつり、伝統文化として華道池坊、伝統行事として葵祭と祇園祭を事例とした。これらの行事がイベント化したのは、時代の流れやニーズが関係し今日に至った背景があった。

第7章では、京都市が毎年実施している入洛観光客数調査の推移から、特に変化の目立

つ時期や停滞期など、特徴的な数値を取り上げ、変化のあった時期にどのようなイベントが開催されていたのか、またどのような出来事があったのかを探り、イベントの開催や、マイナス要因の影響を受けやすいと言われる平和産業である観光に、事件や災害などの要因がどれほどの影響を及ぼしているのかを検証する。

第8章では、第1章から第7章まで見てきた中で、京都がイベントを開催することによって、どのような効果を挙げてきたのか、また、イベントを開催することによりどのように観光都市として京都が現在のよう形となったのかを考察した。その結果、近代に入り、インフラ面などが整備されることで、観光都市として徐々に成長を遂げ、さらに数々の博覧会を開催することで観光客誘致を行ってきた歴史があった。東京遷都により荒廃した京都の復興策として取り組まれた京都博覧会は、京都の復興のみならず、産業やインフラ面、土地の開発など、数々のメリットをもたらした。特に、京都博覧会の附博覧として創設された都をどりは、花街に活気を取り戻すチャンスを見だし、今日では京都の風物詩の一つとなって人びとを惹き付けている。そして、国家主導で開催された第四回内国勸業博覧会では、上地令により荒廃していた寺社の復興のきっかけを作り、寺社を観光資源として利用する案をもたらし、各寺社で展覧会が開催された。さらには、英語版を含む観光案内書が多数発行され、国内のみならず海外にも京都がアピールされ、京都は観光都市

として成長していった。近代に開催された博覧会というイベントは、娯楽の少なかった時代、人びとを惹き付ける十分な要素を持っており、イベントを開催することによって集客をするというイベント観光がこの時代から生まれていた。近代を経て昭和期に入ると、博覧会は廃れ、昔から続く伝統行事や年中行事、新しく創設されたイベントが京都の主なイベントとなった。高度経済成長期には、オフシーズン対策としてイベントが企画され、次々と新しいイベントが創設されるなど、新たな取り組みがなされ、観光産業に勢いのあった時代であった。さらには、観光連盟や観光課が設置されるなど、京都のみならず日本全体が観光分野に力を入れ始めた時代であった。そして、時代が平成に入ると、京都市が観光客誘致の施策に力を入れ始めた。特に、イベント面のプランで目立つのが、滞在型観光と夜の観光、オフシーズン対策を推進した、「光」を使ったイベント作りであり、すでに集客面で成果を見せ始めている。

全体を考察すると、近代は、県や国家単位で開催される博覧会などの大きなイベントが主であったが、時が経つにつれ、博覧会は廃れた。そして、昭和に入り、博覧会のような大規模なイベントではなく、市や町単位、学生主催のような小規模で新たな試みのイベントが増加した。一方では、遠忌や開帳、祇園祭や葵祭などの昔から続くイベントも健在している。しかし、これらは本来の神事という特別な形から、一般客が見学できる形に変化し、観光客がそれらを目当てに訪れるような

イベントと化したのである。つまり、現在のイベントは新しいものと、古いものが混在し、さらには大小さまざまなものが存在しているのである。しかし、それらは、反発し合うような存在ではなく、ニーズの多様化により、参加する側が自由に、そして多様な中から選べるような状態になっており、それぞれのイベントが観光客を京都に惹き付ける要素となっているのである。